

世界名詩集(全26巻)12

ゴーチエ 七宝とカメオ

ネルヴァール 小歌詞 抒情 幻想詩篇

定価 六〇〇円

昭和四十三年五月二十五日 初版発行

訳者 齋藤磯雄 中村真一郎

発行者 下中邦彦 東京都千代田区四番町四番地

発行所 株式会社平凡社 東京都千代田区四番町四番地 振替東京29639

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

世界名詩集 12

ゴーチエ

Théophile Gautier

七宝とカメオ

ÉMAUX ET CAMÉES

ネルヴァール

Gérard de Nerval



LYRISME

幻想詩篇

LES CHIMÈRES

平凡社

装
幀
原

弘

七宝とカメオ

テオフィル・ゴーチエ

序詞	5	アナクレオン風の抒情小詩	91
ひそめるゆかり	6	けむり	93
女体の詩	11	アポロニー	94
手の習作	16	盲目	96
ヴェネチアの謝肉祭	22	歌曲	98
変奏曲		冬の幻想	100
白・長調の交響楽	31	泉	105
死後の嬌態	36	火葬と墳墓	107
心のダイヤモンド	39	甲冑の晚餐	114
春の最初の微笑	42	懷中時計	123
コントラルト	45	海の妖精	126
青い眼	51	鬢の捲毛	130
ロンダラ	55	茶薔薇	132
オペリスクの郷愁	59	カルメン	134
ナポレオン麾下の老兵たち	69	燕らの語れる	136
海上の悲しみ	76	基督降誕祭	141
薔薇いろの衣裳に	80	死んだ娘の玩具	143
世間は意地悪	83	新聞の文芸欄の後に	146
シエラのイネス	85		
		回想の城	148
		椿と雛菊	163
		エジプト女	166
		黒人奴隸	168
		屋根裏部屋	170
		雲	174
		つぐみ	177
		春をつくる花	180
		末期のねがひ	184
		歎きの雉鳩	186
		良夜	188
		芸術	193
		齋藤磯雄訳	

序 詩

かの帝国の戦^{いくさ}のみぎり、

砲声おどろしきをもよそに、

ゲーテは創りぬ『西方詩集』¹を、
藝術の息^{いき}ふ涼しきオアシス。

ニザミがために沙翁²をすて去り、

身に白檀^{びやくたん}の香を焚きしめ、

東の邦^{くに}の律呂^{りつる}に載せて

毛冠鳥^{マウド}の悲歌を記しぬ。

ワイマールなる褥^{しとね}の椅子に

現世^{うつしよ}を避け、ハフィツ³が薔薇^{ばなびら}の

葩^{はなびら} つみしゲーテに倣^{まね}び、

閉されしわが窗玻璃^{まどはり}を打つ

大旋風^{おほつむかぜ}ころにかけず、

われ、『七宝^{しっぽう}とカメオ』を作りぬ。

ひそめるゆかり

汎神論的マドリガル

古りし世のさる神殿の破風に、
大理石ふたつ、三千年間、
アテネの空の青地にうかべ、
真白き夢を並べ飾りぬ。

同じき貝のなかに凝りつ、
ヴェニスを傷む波の涙か、
二つの真珠、淵に沈みて、
何かは知らね言葉を交しぬ。

ジェネラリーフの涼しき苑生
歎かひやまぬ吹上のかげ、
ボアブデイルの世、二輪の薔薇は、
花びらをしてささやかしめぬ。

また、ヴェネチアの円屋根の上、
脚、紅淡き、二羽の白鳩、
永久に易らぬ愛の巢ふかく、
五月のゆふべ翼をやすめぬ。

大理石、真珠、薔薇、はた、鳩、
なべて崩れ、なべて滅びぬ。
真珠は溶けて、大理石は落ち、
花は萎れて、鳥は失せたり。

形あるもの、神、これをみな
普遍の捏粉に融かし給ふを、
膨らしむべく、砕けし破片は、
深き埧堦の中に消えゆく。

変幻、化成、徐々に起りて、
白大理石は白き肉体、
紅き花また紅き唇へと、
もろびとの身に作り直さる。

若き相思のふたりの胸に

鳩は、やさしくまた含み啼き、

美しき笑ひの宝石筐に、

真珠は、皓齒のかたちに鑄らる。

これ、拒み得ぬうましさをみてる

共感の情胸にあふれて、

到るところに、心と心、

はらからなるを覚ゆる所以。

くゆり香、光、あるは彩の

いざなひ招く声に応じて、

花をめさせる蜜蜂のごと

原子は原子をさして飛びゆく。

思ひいづるは、破風の上、はた

海の底なるありし日の夢。

波さやかなる泉のほとり

香にこそ匂へ花の語らひ。

黄金の球ある円屋根の上に
交せる接吻、羽根のをのき。
心移らぬ微粒子のむれ
なほもかたみに、慕ひ、求めつ。

忘れし恋今しめざめて、
おぼろに浮ぶ遠き昔や。

花は真紅のくちびるに触れ、
わが息を吸ひ、われなりと知る。

笑ひのきらめく皓歯の貝に
真珠はおのが白さを認め、
乙女の肌に、恍惚として
大理石は知る、おのが清けさ。

鳩は聴くかな、うましき声の、
おのが歎きの反響なせるを。
抗ふ力、なべて失せゆき、
見知らぬ人は、恋びととなる。

君をし見れば、焦がれ、をのく。
いかなる円屋根、薔薇、破風、波の、
対なる二人をかつて知りけむ、
問はず、鳩、花、大理石、真珠を。

女にょ体たいの詩

パロス②の大理石

恋びとの心やさしい夢想家に、
おのが宝の数々を見せたいものと、
或る日、彼女は詩を読まうとした、
その美しい肉体の詩を。

先づ、堂々と、勝ち誇り、
王女のやうな身ごなしで
朱しゆの天鷲てんじゆ絨の波を曳きずり、
いとも豪華な姿を見せたが、

イタリ③ア座の棧敷さじきのほとり、
楽人たちの奏でる歌に
讃辞のさざめきを聴きとりながら
輝くときの姿をそのまま。

次いで、藝術家の熱狂に駆られ、
厚い天鵞絨をさつと脱ぎすて、
雲かとまがふ麻布のなかに
見事な輪郭の素描を示した。

肩から腰へとすべり落ち、
褌なげやりな肌着は、
さながら白い雉鳩のやう
白い素足に襲ひかかった。

その姿こそ、肉の大理石、
クレオメネスかアペレスのため、
あの『水を出るヴェニヌス』となつて
海辺に裸身の姿勢をとるやう。

虹かときらめく乳いろの玉、
ヴェネチア真珠の大粒が、
その清々しい縹子の肌膚を
雫に代つて滴り落ちた。

ああ、魂を奪ふ眺めよ。

その神々しい裸体のなかには、
変る姿態の詩節ごとに、

美の讃歌が謳はれてゐた。

をのく月の光を浴びて
砂くちづける波さながらに、
物柔らかなうねりを描いて
尽きることなきその艶やかさ。

しかし程なく、フィディアス、ヴェニユスの
遠いむかしの藝術に倦み、
これとは異なる造形の詩に
その裸身の魅力を蒐めた。

カシミア産の絨毯に坐し、
今や土耳其の後宮の妃、
恍惚として顔うつし出す
鏡に向つて、珊瑚の哄笑。

心のどかなグルジア女、
すらりと長い水煙管もち、
豊満の腰これみよと

片足折り敷くたたずまひ、

アングル描くオダリスクかと、
腰のまろみを弓なりに、

虚弱な美德、何するものぞ、
蒲柳の羞恥、何するものぞ。

退れ、物憂いオダリスク。
さあ明るみに置いた油絵、
光を浴びたダイヤモンドだ。
恋のさなかに輝く美女だ。

頭うつむき、頭のけぞり、
夢の腕に揺りあやされて、
乳房突き出し、息せき喘ぎ、
褥の上にどうと倒れる。

燦^{にじみ} 銀^{ぎん}なす眼^{まなこ}玉^{たま}の上に
雙^{さう}の臉^{おもて}が羽^は搏^{はた}いて、
視線^{しせん}は遠^{とほ}く真^ま珠^{しゆ}母^ぼいろの
空^{そら}の彼^{かの}方^{ほう}をふり仰^{あや}ぐ。

薄^{れい}紗^すの花^{はな}を散^ちらした屍^{しかばね}衣^いで、
蔽^{おほ}つて欲^ほしいこの艷^{あや}姿^{すがた}。
恍^{あや}惚^ふ感^{かん}に押^おし倒^{たふ}されて、
歓^{かん}喜^ぎのあま^まり死^しんでしま^まつた。

真^ま珠^{しゆ}で涙^{なみだ}を象^{かたど}つてある
死^し者^{しや}の悲^{かな}しい花^{はな}の代^{しろ}りに、
パ^パル^ルム^ム堇^{むす}の花^{はな}束^{たば}を、この
肉^{から}体^だの上^{うへ}に歎^{なげ}かせたい。

さあ、心^{こころ}地^ぢよい真^ま白^{はく}な墓^{はか}、
臥^{ふし}床^どに、そつと載^のせるがよい。
夜^よになつたら、詩^し人^{にん}が行^いつて
跪^か坐^ざ礼^{らい}拝^{はい}を献^{けん}げるだらう。